

## 2 1 9 サラリーマンの社会

経験した者にとっては、サラリーマンという当たり前の存在。しかし、経験したことが無い者にとってはサラリーマンという不思議な存在。

いや、法律事務所のイソ弁や、税理士法人の勤務税理士は異なる。彼らには最終的には独立の自由がある。さらに、彼らは、上司がいる場所でも平気で発言するが、サラリーマン社会では、上司がいる場所では部下はひと言も発言しない。だから、監査法人や法律事務所の勤務経験をもってはサラリーマン社会を語れない。

勿論、サラリーマンにも多数の種類がある。しかし、その特徴は次のように表現できるのではないか。

①大学卒業時の就職戦線で一斉に企業を選ぶ必要がある。そこでの選択が自分の一生を決めてしまうという現実。その後、②彼らが働く動機は、給料なのか、出世なのか、生き甲斐なのか、自己実現なのか、会社のブランドなのか。いや、その全てだが、税理士や弁護士と比較した場合の構成比が大きく異なると思う。③サラリーマンの階層構造、つまり、社長になれる可能性があるルートで採用された人達と、支店長で止まる人達という階層構造と、その職場での上司、仲間、仕事との関係。④総合職といわれる制度における女性社員の位置付け、さらに正社員に混ざって働くパート、派遣の人達の仕事、地位、生き甲斐。

これらについて混沌とした人達が混ざっているのがサラリーマンの社会だ。そのことを、仮に②について論じれば次のようになるだろう。給与額が4 0 万円から4 2 万円になったことを喜ぶ人達と、2 0 0 0 億円のプロジェクトに参加したことを喜ぶ人達の違いだ。勿論、程度の問題だが、これが支店長を終点とする地域採用の人達と、社長を目標とする

本店採用の人達の違いなのだろう。そして、社長を目指す人達が、最後には、日経新聞の『私の履歴書』で自分の成果を語ることになる。

ただ、これは私達の業界にも存在する差異だ。稼ぎを目標に事務所を経営する人達と、自己の成長と実現の為に働く人達の違いだ。勿論、程度の差に過ぎないし、また、他人との比較は容易ではない。だから、誰も同じ目標で生きていると思い込んでいる。しかし、資格商売にも、多様な動機の人達が存在するように思う。

次が④の問題だ。男女差別が禁止され、女性総合職という採用基準が採用された。そして女性も男性と同じように営業活動からスタートする。しかし、最終的に男は係長、課長と階段を登るのだから、その苦労にも意味があるが、出産、あるいは亭主の転勤で退職する女性には、その苦労は、単なる苦労でしかない。

しかし、内勤というバックヤードは、退職し、再雇用された女性パート社員や派遣社員が担当し、正社員が座る椅子はない。その結果、その支店で一番に古い職員はパート社員という現象が出現する。男女差別が禁止されたといっても、それは制度であって、実体ではない。差別を禁止すること自体が、女性の働き方を難しくしてしまったように思う。いや、その中から極一部の女性が、多様な犠牲を払いながら地位を登り続ける。

世の中で働く人達の8割はサラリーマンだ。彼らが語ってくれば、私が想像する必要はないのだが、彼らにとって当たり前の空気のような存在なるが故に、彼らは語らない。そこで見当違いの想像をしてみたのが、この原稿だ。

1 3 4 8 字